

水牛通信

人はたがやす

水牛はたがやす

稲は音もなく育つ

へんな旅 2

ロバート・リケット 小泉英政 八巻美恵

キリコのコリクツ 玖保キリコ 11 走る・その四 デイヴィッド・グッドマン 22

名僧旦過帳 病気・カフカ・音楽(その二) 高橋悠治 24

セタガヤが僕の寺をダメにする 14

高橋卓志 音楽時評 坂本龍一 28

料理がすべて 田川律 18 水牛かたより情報 30

VOL.8 NO.4

毎月1回・10日発行

定価200円

へんな旅 ロバート・リケット 小泉英政 八卷美恵

三里塚の小泉英政さんがカラワン楽団のスラチャイとモンコンをよんで、日本を縦断する農村漁村キャラバンをしたのは、84年10月から12月のことでした。その報告集のために翻訳の仕事や指紋捺捺拒否の運動で大忙しのロバート・リケットさんをやっとなつかまえて、話を聞きました。通訳としてこのキャラバンに参加したりリケットさんは、英語で書いた日記を開き、お酒をちよつと飲んで、さて、おしゃべりは日本語です。

小泉 どうしてリケットさんがあんなに仕事をなげうって一ヶ月間もついて歩いたのか不思議でたまらないという声があるのですが。

リケット いや、今でも後悔していません(笑)。いや仕事のことだよ。仕事が多まってしまった。でも、なんででしょうね。

八巻 リケットさんとカラワンの出会いは？

リケット 82年の秋、三里塚の集会で歌った時。そして、次の年の11月かな、小泉さんといっしょにタイに行って、小泉さんに紹介されて、非常に楽しい一週間をすごしたんだよね。

八巻 じゃ、直接会ってしゃべったりしたのはタイで。

リケット うん、タイで、一週間ぐらいいおじゃましながら。で、楽しい人たちだとわかって。帰ってきたら、小泉さんが、じゃ日本に呼ぼうかっていう話をしはじめたんですね。まさか、大変なことだと思ったんですね。でも、本当にやっただよね。

八巻 ね。

小泉 キャラバンで印象に残ったところを少し話してみませんか。

リケット 荒井まり子さんの実家に泊まった晩、娘さんの話とか、いろんな

話を聞いたんです。話の途中でお父さんの方が泣きだしたんですね。74年田中角栄が東南アジアに行った時に、タイの人々が反対デモをおこして、日本人たちにも影響を与え、まり子さんとか、まり子さんのお姉さんも影響をうけて、日本とアジアとの関係を考えて、日本とアジアとの関係を考えたという話を聞いて、ひとつのサイクルを感じて印象的だった。あと、南陽市で、いろんな話があった。

小泉 ぼくは寝ちゃったんだよね。

リケット カラワンはとにかく12時すぎないと元気がでないんだよね(笑)。こっちがくずれそうになると、むこうは、パツと目があいて、とにかく通訳しろと。黒沢さんという15代目の百姓をやっている人が、歌詞カードを読んでいたんですね。で、「黄色い鳥」の詩にびっくりして、歌ったか、と。いや、その歌は年に一回くらいしか歌わない。なぜかっていうと、殺された学

生たちを偲びながら歌う歌だからだ、と。黒沢さんは詩を書く人で、「黄色い鳥」に感動して、スラチャイに歌ってくれと。その時、楽器がなかったんですよね。で、スラチャイがメロディをハミングし、黒沢さんが詩を読んだわけ、とても美しいことだった。

壬生町で、詩人のナワラットが来て、彼が笛を吹いて、いっしょに「黄色い鳥」を歌った時も、非常にいい感じでした。あと、奄美の無我利で、公民館でコンサートをやったときに、暑くはないけど、むし暑いという感じがあって、ちょうどカラワンが「雨をまつイネ」をやりだしたら、雨がふりだした。言葉でうまく説明できないけど、印象的だった。

八巻 タイではね、雨をもってくるお客っていうのは、すごくいいんだって。涼しくなるでしょう、暑いところだから、雨がふると。それから、お米をつ

くることにも関係あるんでしょうね。
小泉 日本では、兩男とか兩女とか、あまりいいことにとられないけどね。
リケット もうひとつ、移動しながら彼らの歌をはじめて聞くでしょう。とにかくタイ語でうたうでしょう。最初は、どういう内容の歌か、聞いてもよく分からないんですよ。で、車のなかで小泉さんが歌ったり。奈良ぐらゐまで行くと、歌の半分ぐらゐ、彼、覚えてるんですよ。で、この言葉はどういう意味なのかと聞くわけね。いろんな話が出て、歌の意味もわかっていて。曲はポップ・ディランみたいだけど、詞自体は重い言葉だし、日本とは現実がちがうってことを改めて感じたりして。カラワンにとっては自分の目で見て、感動して書いたものだから、それが現実で。そういう、日本とタイの現実のギャップに、聞いている人たちも驚いていた。四人で一ヶ月以上も

もいたりして、当然革命の話とか、ゲリラの話とか、これからどうするのかとか、いろいろ言うわけね。スラチャイとモンコンは、非常に迷っているところなんですよね。社会自体かわってきたし、76年からやってきた革命闘争というのが、運動のなかに矛盾があったりして、ある意味ではそのような政治をあきらめて、ちがう政治をさがさなければいけないっていう。で、タイで、彼らは今、それほど貧しい生活しているわけじゃないし、カセットも売れているし。スラチャイはどれぐらゐお金を使っているか教えてくれたんだね。
八巻 すごい額だったでしょう(笑)。
リケット 彼らの日常生活にもいろいろ問題になるようなところがあって、そのへんで、言葉が足りないっていうか、どう伝えていいか、むずかしかったんですね。

よくもけんかもしないで……、それであつという間に何語でしゃべっているか忘れてしまふんですね。
八巻 そう、そうでしょう。

リケット 小泉さんに英語で話したり、カラワンに日本語で話したりして。しかも、あるところに着いたときなんか皆、ワツとやってきて、小泉さんに、タイからようこそって言って、モンコンのことを小泉さんだと思っているんだよ。そういうこともあって、帰ってきて、しばらく頭がおかしくて、最高に楽しかったです。そして、よその土地に行つて、とてもあつのおもてなしをうけて、楽だったんですよ。むしろ、気がすまないくらい。こっちがその分を返せなかったっていうか、うしろめたさがあるんだけど。でもよくもね、タイの人たちと、ばくみしたいな外人と、そして、日本人ばなれの小泉さんがいて、最終的に歌のあと、みんな

八巻 ふたりはへらへらと自分の思うことを言うんだけど、それをただ直訳しても、誤解されちゃう感じなのよ。
リケット とにかく聞くほうは目をキラさせて、期待して……。

八巻 わたしね、スラチャイが「森」から帰ってきて、1ヶ月ぐらゐの時に会つたのね。その時はすごい感じだったよ。非常に傷ついているっていうか、ね。それで「森」のなかであつたことをいろいろと言つたたびに、泣くの。芸術活動をしていたわけでしょう、森のなかでは。コンサートをするのにならんと、ずーっと何列も丸太をわたして兵士がそこに腰かけて聴くんだった。一人でギターをひきながら歌うんだけど、もっと、もっとと言われて、結局八時間ぐらゐぶっ続けてやらなければいけない、それも、断るっていうことができないうのね。休みなし、

なのんびりして、ゆっくり話したりして、お互いに、なんていうかな、人間を感じはじめたなっていう、わりとその点で楽しかったなと思うんだよね。

やっぱし、同じ世代っていうかな、だいたい同じ時代。皆若かつたし、国はちがうけれども、なにか望みをもって、何かをやつて、それで日本で出会つて、非常におもしろいと思うんだね。だって、彼らが「森」に入つたのは、管制塔の少し前じゃないのかな。クーデターがおきたのが76年だから。鉄塔の撤去とか、三里塚は大変だったし、ぼくの方も少し前だけど、ヴェトナム戦争でいろいろあつて、亡命してしまつて八巻 通訳することで困つたことってありませんでした？ あつたでしょう、技術的なことじゃなくて。

リケット そうですね。地方よつて集まつた人たちのなかに、政治運動をやっている人たち、政治党派の人たち
リケット スラチャイ？
八巻 うん。
リケット モンコンはちよつとちがうね。

八巻 あの人のほうがまだ純情よね。共産主義を捨てきれないっていうのがあるんだけど、だって、そういうふうなサイインしたから、そうだと思うよって言った。
リケット 日本のいろいろきつい運動の話しても、ピンとこないみたいで、日本はこんなに豊かなのに、何で問題があるのかってね。ま、水俣に行つたら、いろいろタイでも知られている

から、非常にはっきりわかったようだけれども、むつかしいね。

八巻 でも、あの人たちの思っている日本で、なんて言ったらいいのかな、こんどのキャラバンで、普通の情報からえがく日本じゃなくて、自分たちの回った日本のイメージがあるでしょう。でも、それもほんとうの日本とずいぶんちがうと思うのね、おそらく。それがどのくらいのものなのかなっていうことに興味がある。

リケット 日本とタイとの状況が全然ちがうからうまくつたえられなかったけど、ま、見る目があるから、そんなにまちがって伝わってないと思うけども。

八巻 81年にモンコンをはじめて三里塚に連れて行ったんだけど、その前に三里塚の話をしてたから、それなりに分かっていたと思うのね。でも、実際に見てみたら、信じられないよってモ

ンコンが言う。貧しいとか、反対運動をしてるとか言ってたって、みんな車を持ってるとんだからって。

リケット そ、その感じ。

八巻 それからね、うちで、ごはんのおかずがちりめんじゃこを食べたのね。おいしいって言ってから、でもこんな小さいうちに食べちゃってもったいない、もう少し大きくなるのを待てば、もっと大勢の人が食べられるのに、って言うの。三里塚の農民が、みんな車を持っていていうのはかなりショックだったらしくて、タイに帰ってから会う人ごとに言ってたよ。

リケット おかしな話もあったんだね。和歌山の本宮町で山ザルの話をしたわけ。そうすると、スラチャイは、サルはおいしいと言いだしてね。

八巻 そう。動物の話をする、かならずあの人たちは、あれはおいしい、あれはおいしくないと言味のことを言う

のね。

小泉 コウモリもおいしいって言っていたね。

八巻 ゾウはおいしくない。足首のところだけはおいしい。

リケット 小泉さんは、大変だったんだよね。

八巻 でも小泉さんて、大変だったいうことを自覚できないのよね。自覚してないって言うより、できないの。

リケット 84年に入って、呼びますよって言ってね。小泉さんが言っているからたぶんやるだろうと思ったんだけど、でも、どういう形になるのかと思ってるね。とにかく40ヶ所にいろいろ段どりして、大変だったと思うんだ。カラワンから、行きます、と返事がきたところでもかなりあわてたんだよね、みんな。

八巻 え！ ほんとうに来るの？って感じ。

リケット 小泉さんとこの美代さんはね。ぼくも、ああ、小泉さんはえらいことをやってしまったなあ。お金はどうなるんだと。でも小泉さんはあまり心配するような顔しなかったんだけれども。

八巻 心配してなかったんでしょ、だって。

小泉 なんとかなると。

八巻 そらね。

リケット スラチャイたちが何度も、おまえはフアラシじゃないか、と言うんだよね。フアラシというのはタイ語で外人という意味、しかも侵略してくる外人だからね。いわゆるアメリカ人とか。

八巻 白人ね。でもこのごろは日本人もフアラシの一種だって。

リケット そういう関係なわけね。だから、夢にもフアラシといっしょにまわるとは思ってたみたい。お互

いに、いつも、びっくりして……。おまえはフアラシだって、何度も(笑)。

八巻 だからリケットさんがいっしょだったのが、すごくよかったと思うんだ。

小泉 そうだね。

リケット それが一方で、小泉さんに対しては、「コイズミ——」って。なんか、いろんなニュアンスをふくんでいてね、ぼくもつかめなかったんだけど「コイズミ——」って。笑っちゃうんだよね。

八巻 でもリケットさんのことは、フアラシじゃない、日本人的だ、コイズミよりも日本人だと、わたしにはそう言ってたけど。

リケット スラチャイはしっとしてい

るんじゃない。

八巻 だれに？

リケット 小泉さんに。

八巻 「コイズミ——」ね。スラチャ

イはコイズミは自分と同じタイプだって。リケットはちがうって。

リケット あ、それは安心した(笑)。

小泉 他に、美恵さんに何かぐちをこぼすなんてこと、なかったですか？

八巻 ぐちねえ。普通のコンサートと違うんで、やっぱりちょっと……ということは言ってたけど。それぐらい。農村をまわるということはわかっていても、きちんとしたコンサートをやるという、そういう感じで来たんじゃないかな。

小泉 でも、途中で、ああ、やっと小泉が何をやるうとしているか分かったと言ってくれた。

八巻 それから、観客のなかに、ひとりでも音楽のこと、わかっている人がいると、すごくいい、と言ってた。それは何度も聞かされた。石垣のひばりさんみたいなね。あのときはすごくよかったですね。

リケット 小泉さんはキャラバンを終わってから、自分の考え方が変わったと言っていたけど、どう変わったんですか。

小泉 あんまり変わらないですよ。

八巻 変わったって言うのをわたしも聞きましたよ。

小泉 今まで、闘争が一番上にあっただよ。そのためにのみ生きているなんて、そんながちがちなじゃないんだけれど、どうもそのことにとらわれすぎているところがあって、もう少し、闘争をひきずりおろして、闘争とか生活とかいろんなことを並列して考えられるようになったってどうか、せっかく生まれてきたんだから、鳥が羽ばたくように、エサをついばんでおいしいと思うように、生きればいいんだなあと。それを基本にして、闘争のことを考えたり、社会的なことを考えればいいと。

八巻 あの人たちを見ると、わりと快樂的なね。快樂的というとなだしくないかもしれないけど、羨しむというか、羨しむを見出すというか……。

小泉 彼らとずっと行動をともにしていた影響もあるんだろうけども、奄美とか、沖縄あたりとか、ずっと下がってきて、スラチャイも言っていたんだけど、日本はどこに行っても同じだと、建物も、何も変わらない。奄美にいくと、ちがうなと言いだして、ぼくもそう思ったんだけど。あの奄美の島である一人の女性が産まれて、育て、海でとれたものと、畑でとれたものを食べて、結婚して、子供をつくって、子供を育てながら老いていって、タイにも行かないだろうし、東京にも行かない、名瀬には出るだろうけど、奄美の島のなかで一生、終わっていくばあちゃんたちがいるわけでしょう。コンサートを聞きにきてくれたばあちゃん

たち。それでいいんだなあと、小さな部落の上から、三十軒ほどの村と海を見て思ったんだよね。

八巻 それで、今度みたいに東京とかタイとかから人が来ても、ちゃんと受け入れられるっていうのがね。

リケット 奄美の新元博文さんからおもしろい話を聞いたんだけど。彼が言うには、昔の人間というのはね、一人一人に自分を守る動物がいると信じ込んでたんですね。人によって、熊がその人の守り神だったり。今の社会のなかで人間はそういうふうにならなくなった。街の人間には街の人間の論理があって今の三里塚を見ると、街からできた活動家とかいっばいいるんだけど、その人たちは、ちがう論理で動いているわけですよ。で、百姓は百姓のペーソスで、百姓の神様がいてわけですよ。三里塚が勝利するためには、街の論理にひっぱられないで、自分の百姓

の論理にしたがって、自分の生活をつくりながら闘争をつくっていく、生活を守るために闘争があるし、百姓の神様は必ず勝利すると、言い方はもう少しこった言い方をしていたけれど、そういうことを言っていた。

小泉 ずっと、キャラバン中、どこでも、日本の農民は、アジアの農民たちを踏み台にして、今の繁栄がある、アジアのことを自覚しよう、なんてぼくは言っていたんだけど、奄美に行ったらね、何かこう、そんなことを言ってもあまり意味がないんじゃないかと思ってしまうんだね。奄美こそ、アジアであり、沖縄も、石垣もアジアであるし、そんななかで、言葉やだんだん無くしていった代わりに、ちがうことが入ってきた。

リケット 音楽もかわってきたんですね。北から南へ向かって行くと、陽気になったんですね。昔の古い、モンコ

ンの「手をつなごう」なんて歌はすごく陽気な歌なんです。タイダンスの歌とか、雰囲気が変わってきたんですね。うーん、沖縄は残念でした。行きたかった。でもなんか、すごい経験……。

小泉 また同じことをやれと言われると、いやそれはもうと言いたいけれど(笑)、なかなか一生にあんなことってないだろうし、一度はね、いいていうか、なかなか得がたい経験だったね。

リケット 日本の文化かもしれないけれども、最初は静かに聴くわけね。あんまり自分ださないで。それで、そこで溶けちゃって、交流会に入ってお互いに人間の豊かさっていうか、感じあったり、発見があったり、そういうのがあって、ごく短い時間だけでも残るんだよね。

小泉 日本をザーツと通りすぎただけ

だけれど、自分がる過ぎたって感じだけれど、る過ぎたとは、自分で言えて妙だな、と。

八巻 自画自賛ね。

リケット る過ぎて、なに？

八巻 る過ぎて、たとえばコーヒー入れる時につかうフィルター・ペーパーがあるでしょう、フィルターよ。

小泉 コーヒーはあまりいいたとえじゃない、フィルターがあって、泥水でいいんだよ。

八巻 濁っているのが澄むっていう。

リケット わかりました。

小泉 カラワンたちに何が残ったのか気がかりだけど。

八巻 でも、そんなことまで責任もてないじゃない。来るかって聞いたら、来たいって言って来たんだから。ね。そんなあの人たちの問題でしょう。また来たいって言うてるらしいから、よかつたんじゃないの。

小泉 どっかで呼ばないとね。続きをね。各地で言っていたじゃない。呼ばう、呼びたいと。

八巻 いやいや、だからさ、みんなそんなふうに言うんだけど、呼びたいって言って、ほんとに呼ぶ人って、そうはいないじゃない

リケット でも、日本のかくれているところを、ずいぶん見たというか、まわったんですよ。

八巻 ふつう思っているのとはちがう地図が、彼らのなかにある。

小泉 『もう一つの日本地図』

八巻 そういう本あるね。

小泉 あれは、キャラバンのあとから出たんだけど、わりと、あの本に載っているような所を歩いたね。

八巻 水牛楽団で最初にモンコンひとりと呼んだときに、うちにあった喜納昌吉とチャンプルーズのレコードを聞いて、気に入った曲があったのと、そ

のジャケットに喜納さんの写真があったね、それがモンコンの弟とそっくりだというので、そのときから沖繩はちょっと特別な感じがあったみたい。モンコンの実家でその弟さんに会ったことあるんだけど、ほんとにそっくりだった。でも、その話をして沖繩に行ってみたいなんて言っていたときは、スライチャイはまだ「森」のなかにいたし、ほんとうに夢のような話だと思っただのね、こんなふうを実現することもあるのね。もうすぐテープが終わるから、リケットさん、言いたいことを言ってください。

リケット いいよ、美恵さん言ってよ。八巻 おととしのことだから、もうほとんど忘れちゃったような気がするけど、今度のキャラバンだけじゃなく、カラワンと出会ったことは、わたしの人生のあるひとつのエポックなの。リケット うーん、なんかね。いろいろ

なバラバラになっていたものが、いっしょになったという、すごくそういう感じだよ。カラワンはそのきっかけになったんですよ。日本をまわって自分と同じような人間にいっぱい会ってね、不思議というか、嬉しいというか、行ってよかったと思っっているんですよ。美恵さんはどういうエポックですか？

八巻 水牛楽団っていうのはね、カラワンに代表される、ああいう歌のグループがクレーターでもう歌うことができなくなっちゃったっていうんで、はじまったでしょう。だから、いろいろ思い入れがあったのね。そういうのを、わりあいと、彼らが裏切ってくれたからね(笑)、ね。

リケット なるほど。八巻 それがすごくよかったんだらうって思う。だから、こうしてつきあうことができてるんじゃないかしら。

キリコのコリクツ 玖保キリコ

私の部屋はともまたない。

衛生学的には、そう汚くはないと思うが、とにかくめっちゃくちゃに散らかっている。

不意に友だちが来ることになって、「散らかってるけど……」

と言って、部屋に通じたりすると、本当に散らかっているの、友だちはびっくりする。

「あら、そんなに散らかってないじゃない」

なんて言ってくれる人は誰一人いない。

皆、無言で部屋の片づけを手伝ってくれる。

きたなさに見るに見かねて、というよりも、そうしなければ座るスペースができないからだ。

兄は女の部屋じゃないと悪態をつく。母はもう何も言わない。

時どき、無性に、

「部屋を片づけなければいけない」という思いにとらわれて、部屋を片づけ始めたりするのだが、気がつく、夕方になってるのに、雑誌の山の位置が移動しただけ、なんて状態になっていたりする。

全て一度に片づけようとするから、なかなか片づけられないのだからかと思っ、ある時、部分的に区切って片づけてみようとしたことがあった。

机の上。

本棚。

もう一つの本棚。

プレヤーのまわり。片づけているときに、おかしな事に気がついた。

普通、何かを片づけ始めた場合、その片づけている個所がすっきりするものなのだ。しかし、私の場合、ある程度、ごちゃごちゃに置かれていたものが少し整えられはするが、それらは一方向に棚の中なり、引き出しの中なりに納まってはくれない。

依然として、机の上に、本棚の前に出たままなのだ。

本や雑誌や画材の山が姿を消さずにとただだ、部屋の中を移動するのを見て、私は悟った。

私の部屋は決して片づかない。

そして、それは、私が掃除がそんなに好きでないとか整理整頓がヘタとかいう問題ではないのだ。

私の部屋が片づかない理由。

それは、私の部屋が狭いからなのだ。どこをどういう風に考えても、私の所有する物（私が考えるに、私が所有しておかなければならない物）に比べて、私の部屋は狭すぎる。

本箱は3つあるわ、机は両ソデ机だわ、

送られてきたり、買ったりする雑誌の山々はあちこちに積まれているわ、明らかに、これは私のせいではない。

私の兄の部屋は広い。

天井も高い。

兄は、昼間働いているから、夜しか部屋を使わない。

なのに、おまけに日あたりもいい。

私は非常に合理的な考え方に基づいて、兄に部屋の取り変えっことを提案した。

だめだった。

がっかりと、広い兄の部屋から帰ってきた私の目に映った私の部屋は、犬

小屋のように小さかった。

私はとうとう決心した。

家を出よう。

家を出て自分だけの部屋を借りよう。思い出すのだ。昔はあんなに親からの自立を望んでいたではないか。

今の私には自立の意識は全く無いが（めんどうだから）それでもこの部屋は狭すぎる。

これではアシスタントが仕事にきても、布団も敷けないではないか。（アシスタントは使っていないが。）

私が母に家を出たい由を告げると、母はあきれたように、

「出る、出るって昔から何度も聞かされたけど、全然出てかかったじゃないの」とあまり相手にしようとはしなかった。

それでも、自立のためではなく、単に部屋が狭いからなのだ、という私の説明に納得し、自分も不動産屋へ一緒

についていくといい出した。

余程頼りない娘だと思われているらしい。

とにかく、私と母は翌々日、三軒茶屋のとある不動産屋へと向かった。

私が不動産屋さんに条件を述べると彼はすぐさま

「ぴったりのがあります。お勧めですよ」

と一つの物件を出してきた。

いくつか調べてみた中でも、その物件は確かに私の条件に近かった。

早速、車でその場所に行ってみた。古いが、しっかりした作りで、廊下や階段も広い。

三階建のアパートの三階の端の部屋で、南と東に窓があり、風通しが良さそうである。

ベランダもついている。

私も母もそのアパートがかなり気に入り、90%ぐらいは借りたいと思う気

持ちがあることを不動産屋さんに言った。

そして、次の日曜日に昼間その部屋を見せてもらって、実際、駅から歩いてみた感じをつかんでから、ちゃんと契約したいと思う、と告げた。

ただ少し気になるのは、そのアパートが駅から歩いて15分かかるとのことだった。

ちょっと遠いと思った。

その夜、私は友だちに電話しまくって、引越しすることを言いふらした。言いふらすついでに引越しの手伝いを頼み、占いの先生には方角と時期を占ってもらった。

方角は問題がない、時期はどちらかといえば四月より三月の方が良い。四月の二日までを三月と考えるから、それまでに全部引越すのが無理でも、何か身のまわりの物を運び込んで、それ

で形だけでも引越したことにしなさい。

私は四月の二日までに本か何かをその部屋に置きに行くことを決め、四月の六日を引越しの日に決めた。

何となく遠足の前日のようなウキウキした気分になって、その日は床に就いた。

が、眠れない。

気になっているらしいのだ。

駅から歩いて15分が。

私が引越を言いふらしてまわった友人たちのほとんどは、私が説明した引越先に対して、よさそうな所が見つかって良かったね、ぐらいいの反応だったのだが、反対はしなかったものの、難色を示した者が2名いた。

出不精のMと歩くのが嫌いなSだ。

彼らは口を合わせたかのように

「駅から遠い」と言っていた。

私は決して歩くのが嫌いではないが確かに駅から15分は遠いと思った。

たまに出歩かないだらうが、きっと私は毎日出歩くだらう。

そう考えた途端、何だかとてもめんどくさい気分になってきて、そのまま朝まで眠れなくなってしまった。

朝、コーヒーを飲みの下に降りていった私は、しばらく考えた末、母に打ち明けた。

「せっかく、時間をさいてくれて悪かったけど、あのアパートやめようと思う。駅から遠すぎるから」

すると、母もこう言った。

「私もそう思った」

私は早速、再び友だちに電話をして引越しのとりやめを告げた。

みんなはあきれ、そして私は今でもきたない部屋に住んでいる。

名僧日過帳 セタガヤが僕 の寺をダメに する 高橋卓志

日過帳とは投宿帳、現代風に言えば宿泊者カードのことである。

僕が住いする田舎町松本の山寺を訪れる奇人、変人、知人、愛人の類いの行状や特徴を住職さんが書き留めたものと思えばよい。

この寺は、世間で言う寺とはかなり趣きを異にしている。ただし、住職が

変り者だということでは決してなく、日過帳に記入される側、つまり僕の寺を訪れる側の人々に、相当な変り者がいるということなのである。
それは、この日過帳を見ていただけば明々白々となる。

最近、寺の坊さん達は忙しで、法事だ、葬式だ、ロータリークラブだ、何だカンダと、墨染めの衣にヘルメットをかぶり、スクーターにまたがってあっちへ走り、こっちへ飛び出し、寺に居ることはごくまれになっている。それならいっそのこと、住職なんかやめて、走職とか、飛び職と名を変えればいいのと思う。

そこへいくと僕なんかは、ズボラも手伝っての出不精だから、できるだけ法事をキャンセルして寺に居ることを心がけているから、わりあい「正しい住職」と言える。

かつて、寺は地域の中心としての村役場であり、相談所であり、公民館であり、文化の発信地でもあったというのに、この頃は、セレモニー業者や葬式屋の下請け、駐車場やマンションの管理人、はたまたコンピュータを駆使しての宗教法人税金対策用経理事務所なんてのを経営してるところまである。おかげさまで僕の寺は、土地もお金もない貧乏寺なので、そんな寺がうらやましいと思いつつも「ああいうのは本当ではないのだ！僕の方が正しい坊主なのだ！」と無理やり納得しているだけのことなのである。

さて、この正しい住職が住む寺には実にいろんな人達が出入りする。ここへ来た人達は、この寺のことをまるで公民館みたいと言い、また酒場ではないかとも言う。もっとひどい人は、タダ酒付き簡易宿泊所だと思っている。

だがしかし、実はこの寺、禅宗の名（？）な寺であるのだ。僕がそう言う「おまえんとは禅宗じゃなくて皆の宗（衆）じゃないか」と言うやつ

がいる。なる程、その通りかもしれないが、本当は泣く子は驚きもつと泣き、年寄りに入れ歯を吹き出し昇天するといわれる程に厳しい禅の道場なのである。その証拠に、なんとたつて厳しい規則がいっぱいある。

例えば「禁入山門葦酒」、つまり酒とか魚、ニンニクのようなクサイものを山門内に持ち込んだり、飲食してはいけないとか、朝は五時起床、掃除、おつとめ、坐禅を必ずやらねばならぬとか、不必要な大声や大きな音を出してはいけないとか……。

何しろ朝から晩まで、風呂場から便所の中までが規則づくめで息が詰まって死にそうになるのだが、書いてる本人が死にたくないもんだから、全くこ

の規則を守っていないのが現状なのである。つまり、規則はあるが、それを「守りなさい！」と言うべき人が守れていないから極めて自由で開放的で、住職にとつても訪れる人達にとつても都合のよい寺となっている。

従って投宿する人々は、僕の行状を眺めながら、「坊さんが率先して酒呑んでんだから……」とか、「坊さんが一番遅くまで寝てるんだから……」とか、「坊さんでも屁をこくんだから……」とか言っていて安心して楽しく飲み明かすというのが最近のパターンとなっている。

この「皆の宗・開放寺」で日過（一夜を過ごす）する人々の中で、圧倒的に多いのが、東京の、しかも世田谷からの来訪者である。

個人様では、深沢の牟田梯三さん、成城の横尾忠則さん親子、池尻に住む「おしっこ博士」の宮松宏至さん、世

田谷のキリストと呼ばれ、羽根木の雑居まつり仕掛け人の沢畑勉さん、そしてご存知桜新町の高橋悠治さん……。

団体様では、野沢の龍雲寺という僕の寺とは比べようもないデッカイ寺が抱えている少年野球チーム御一行。世田谷ボランテニア協会御一行。世田谷教育委員会御一行。それから水牛楽団御一行といったあんなばい、まるで僕の寺は世田谷区民のためにあるようだ。

世田谷ボラ協や教育委員会なんかはこの神聖な道場を合宿所と間違えているし、「ナントカ楽団」は宴会場だと思っ込んでいる。また牟田さんに至っては、最後まで旅館だと思っていたという。

ここらあたりで、原点に戻らなければ、この寺は世田谷に乗っ取られ、ますますダメになってしまう。何とかしなければ……とかなり真剣に考え始めた矢先、強烈なKOPパンチを見舞われ

てしまった。しかもクサーイパンチを
……である。

僕と仲間達が毎年やっている全市の
なおまつり「きましょ長屋」で、オー
ルナイトで騒ごうという企画を考えた。
公共施設は例によって頭のカタイ役人
さんから全部断わられ、仕方なく「お
まえんここでやれ！」というわけで僕
の寺が会場となってしまった。

酒呑み討論会、ミッドナイト落語会、
深夜辻説法を中心に恐怖の一夜を過
したのであるが、午前二時頃から高座
にのぼったのが、僕の寺をダメにした
張本人、セタガヤが生んだ「おしっこ
教」宮松宏至教祖様であった。

二百人近い若者の目の前で、自分の
身体から取り出したばかりの、湯気が
立ちのぼるおもしろい「おしっこ」
を、「カンパニー」の一声で飲み干し
延々と「おしっこ健康法」「おしっこ

文化論」を説いたのである。

ビールや酒やラーメンの臭いが充満
する中に、突然、異様なというか、ヒ
ワイなというか、何だかわけのわから
ない、まあそういうった、えも言われぬ
ニオイが漂ってきたのを記憶している。
その心地よいニオイと、教祖様の人
を引き込む魔性を帯びた語りは、まさ
にLSDそのもので、少数の意志薄弱
者は、ポーゼンジツ、チミモーリョ
ーの世界に落ち込み、グラスを手にフ
ラフラと夢遊病者のようにトイレへ行
き、自分の「ナニ」をたっぷり入れて
「僕もおしっこ教の信者になるウー！」
と一声発すると、ココツとした表情
で、一気に飲み干してしまったのであ
った。

正しいはずの、そして何とか禅の原
点へ引き戻さねばならない、この清く
美しいはずの禅道場は、突如として暗
く、きたならしく、秘密めいた「阿

こ」に熱中するあまり、身を持ち崩し
たり、家庭崩壊の危機にさらされなけ
ればよいがと、本当に真剣に楽しみに
している。

「おしっこ」の狂気が去った後、今
度は「これでもかーッ」といった具合
に、セタガヤから四十二名もの大軍団
が押し寄せて来た。世田谷の教育委員
会が主催する「ボランティアリーダー
研修会」であるという。ところがオッ
トット、セタガヤは日本一のボランテ
ィア活動の先進地ではないか。なのに
何を間違って松本クンダリまで出かけ
て来るのか？ しかも二月下旬、松本
は連日氷点下十度以下の厳冬期なのだ。
それには大きな理由がある。

松本に障害者が地域で生きること
を旨としている有名な無認可の共同作業
所がある。筑摩工芸研究所というこの
作業所は、無公害の石けん作りや、古
着のリサイクル、自動車解体、印刷な

どを通し、地域との直接的な交渉を持
っているのである。僕は寺の仕事がヒ
マな時（ほとんどヒマなのだが）、そ
こで出している雑誌「月刊ちくま」の
編集を手伝っている。

そのちっぽけな無認可の作業所に先
進地セタガヤはターゲットを絞ってき
た。これからは大金を投じた行政主体
の大型施設では、あらゆる面で必ず無
理が生じてくる。障害者みずからが、
地域の生活者として地域と連帯するた
め、街の中へ飛び込んでいかねばなら
ない。施設は街の遊撃手として大きな
役割りを持つことになるはず……と
セタガヤは考えたようだ。それなら松
本へ来る意味もわかるというものであ
る。

三日間の研修中、もちろん僕の寺が
指定宿坊となった。四十名もの人間が
右往左往した割には、わりと冷静に宿
坊業務が遂行できた理由は、ほとんど

片窟」（古い話でキョーシユクです）

に変わり、それまでワイワイ、ガヤガ
ヤやっていた連中が声をひそめ、「お
しっこ教」の教祖様をあがめたてまつ
り、「おしっこ教」に帰依を誓うとい
う、世にも不思議な世界が展開したの
である。「これは本当にお寺なのだろ
うか？ もしかしたら（これも古い話
で誠にキョーシユクですが……）かく
れキリシタンか、SMクラブのカモフ
ラージュではないのか？」という倒錯
した世界に引き込まれいく恐怖を感じ
ながらも、興奮を隠しえない僕なのだ
った。

宮松教祖の後遺症で、今でも僕のま
わりには「健康のため」とか、「人類
の平等は下半身の差別を撤廃すること
から始まる！」などともっともらしい
理由をつけながら、あの日の快感が忘
れられず「おしっこ」を飲みつづけて
いる変な男がいる。僕は彼が「おしっ

若い女の子がいなかったからではない
かと思う。もうこのまま、この寺にい
てもらった方がいいような人も中にい
たりして……。

そしたら、そのおじいさんが、「和
尚さんは禅宗のボンサンでしょ？ 禅
宗は奥さんもうことができないんで
すよ！」と言う。「ドキッ」とした。
かつて、お年寄りから同じようなこ
とを言われたことがある。「禅坊主は
シエックスしちやイカン！」そんなこ
と言われたってもう手遅れだもんね。
なんでセタガヤの人ってのは、そんな
時代遅れの無意味な質問をするんです
かねー。それより誰がシエックスした
っていいじゃないですか。

そんなことをしているうちに寺の門
前に「セタガヤ御宿坊」と大書した看
板を出しそうになった。これだから東
京のシトは困る。すぐシトをその気に
させるんだから……。

料理がすべて 田川律

〈味噌汁みたいなカキ鍋〉

そろそろカキも終り。といっても今からもう一カ月以上も前。編集会議と称する飲み会がいつものように悠治さんところで開かれた。

カキ鍋でもしようか、と考えて、それらしく作った。コブでだしをとり、ダシの素も入れ、味噌をとぎ、カキ、豆腐、シイタケ、ネギ、などを入れたのだが、食べはじめたら、どう考えてもカキの味噌汁みたいでコクがない。みんな空腹だったせいもあって、おいしい、とは言ってくれたが、失敗したという気が強かった。終る頃に鎌田さんがきて、その頃は汁が煮つまって、カキ鍋らしくなっていた。津野さんと

「そうだね。そしたら、いっそほうちよう使わずにやるうか、大胆に」と晴さんもすぐのる。

「それをいためて、そこへエビを放り込んで、白くなるまでいためる」

「白くなるで、どのくらい？」

「べつに、きまってへん。テキトウに、ま、白濁したら、ええんちゃう」

それから、少々、塩、コショウして紹興酒をかけて、最後にトウバンジャンをからませて、オワリ。試食する人がいないと淋しかろうと、ぼくが行ってるガッコの生徒の有沢さんと、その友達の梅田さんに来てもらい、食べてもらったが、「おいしい、おいしい」と味をほめてんのか、男ふたりの料理作りを楽しんでんのか、ようわからんようなほめ方。

アサリと青菜イタメはもつとカンタン。やっぱりニンニクをいためて、そこへ、アサリならぬシジミをバアーン

美恵さんは、ここヘタイのスープの素を入れてはどうか、とトム・ヤム・ナントカのを入れ（なんとこれはあのクノールのマークが入っている）そこへ東急本店で売っている乾燥レモン・グラスをバラバラと加えた。かくてカキと味噌味のタイ風スープができたが、なかなかの美味だった。ただし、煮つまる前から、味噌汁っぽくないカキ鍋を作ること考えねば――。

〈男が男に料理を教えたりして〉

あのKDDのコマーシャルで知名度があがった晴さんと斉藤晴彦さんが料理番組に出る、というので、なるべくカンタンなヤツを教えてほしい、といわれ、ほなら、エビの中華風とアサリと青菜イタメでいこか、ということ、三月九日の日曜日、晴さんここでいっしょに作った。

夕方、下北沢で材料を買って行ったのだが、どういわけかアサリがどこ

とほり込んで、ちょっとフタして（このフタ、というのが晴さんそこにはない。しゃあないので、フライパンを逆さにしてフタ代りにした。そういえば晴さんの所属する68/71黒色テントの作業場で煮込みうどんを作った時、鍋が大きすぎて、フタが小さい。しゃあないので、ネギを二本、鍋にフタしてその上にフタをのせたことがあった。うまいこといきよった、と思っていたら、だんだん湯気でネギが柔らかくなってしなってくる。フタもその分少しづつ落ちそうになって焦ったことがあつた。今度は日本酒をたっぷり加え、塩、コショウして、そこへターサイを千切っては加え、千切っては加えて、それがしなっとしたらでき上がり。

「いやあ、カンタンなもんだね」

と、晴さんは上機嫌。

「よし、明日は（それが録画どりの日）もう、ほうちようなんかは使わずにや

にも売ってない。ま、吉祥寺まで行ったらあるか、と期待したが、何軒かの店のどこでも売り切れ。誰か邪魔してるな、という感じがしたが、ま、今日はシジミで間に合わせよ、とシジミとターサイを買った。どうせ、明日の本番の時はテレビ局の人がちゃんと材料買うといってくれるし。シジミもアサリも貝には違いないし。

晴さんのうち、いつの間にか、レーザー・ディスク、それもコンパクト・ディスクも兼用のヤツが入ってるし、テレビは28インチ。

さて、まず、ニンニクを切って、というところからはじまった。これは晴さんがやるのだから、とぼくはもっぱら、ニンニクの皮むきとか、ターサイを洗うのとか、下ごしらえにまわる。

「ニンニクの大きさはこのくらい？」
「ええね、どんなんでも。そこが男の料理らしいやん」

るぞ。ニンニクなんかも、ほうちようの柄でつぶしてさ。どうだっ、とかいったりして」

「でも、まあ、わからんところあったら電話して。明日はうちにいるからさ」

その明日、電話がなかったから、うまくいったんじゃない。編物を教えたことはあるけど、料理ははじめて。

もつとも、ゲストのふたりは、この二品では夕ごはんには足りなさそうだったので、近くの「ル・ボン・ビボン」へ出かけて、鯛のナンチャラ、とかオードブルを何品か食べた。いやまあさすがおいしい。この店では、出されるものが、どう作られるか考えないことにしている。「あんなもん、うちで作れるワケあれへん」

（三千八百羽のニワトリの顔）

晶文社が「子供」につづいて「家族」というインタビュー集を作るので、また手伝おうとして、そのうちのひとつ

に、大塚まさじの親たちをインタビュ―することにした。かれの生家は養鶏場、それも大阪府下茨木でやっている。いつもかれのことを「トリヤの息子」なんてからかっているもの、あの大会の近くで、地飼いで養鶏をしているなんて、オモロソウヤン、と出かけた。

まさじは、「えらい田舎やで」というけれど、大阪から京都までに、もう田舎なんか残っていないと思っただし、待ち合わせに降りた国鉄茨木駅の前は「万博」のせいで、すっかり開けてしまっている。それでも、車で十五分ぐらい行って、高速道路のワキをすっと入ると、その一角だけ、たしかに田舎の風情が残っていた。

地飼いは、とはいっても、そんなところだから、さすがに放し飼いはされていない。それでも、オートメーション化された現在の巨大養鶏所にくらべ

れば、はるかに家内制手工業。

背丈が一七五センチはある大塚まさじのお父さんは、もう七年近くまえにチラリと大阪厚生年金会館でのまさじのライブで見たきりだが、その時の第一印象と違い、とても気さくなおじさん。ニワトリ大好き少年がそのまま七十歳になったところがある。

なにより感心したのは、今は千羽しかないニワトリが三千八百羽いた時そのニワトリの二羽一羽の顔を覚えていた、という話。

「そら、誰かて、そんな話ウソや思いまっしゃろ。その時も、みんなそういままね。ほなら、どっからでもええから一羽抜いてきなはれ、どっから抜いたか、あてまっさかい、いうて。抜いてきよりましたから、これは、あの棚のやっちゃいうて、あてたらみんなびっくりしてましたな」

アフリカでは、飼っている動物の数

はかぞえられないが、顔を覚えているから一匹でもないなくなったらわかる、という話をどこかで読んだことがあるが日本にも、そんな人がいたんや！

お土産にもらった卵を、本誌でおなじみのデイヴィッド・グッドマンとこで、トリ（このトリは大塚さんとこのとちごた）の水炊きに入れたら、なるほどおいしかった。

（トリの水炊き）

この十年来、グッドマン一家のうちは、ほとんどのところを訪ねているので、今回も京都のうちをぜひ訪ねねばと、百万遍の近くにあるうちを訪ねた。いろんな木が植えられた庭を持つ、たたみのうち。かれらがこんなところに住んでいるのは、ぼくが訪れた中ではじめてなので、はじめは物珍しかったが、べつになんの違和感もなかった。

グッドマン一家をまめに訪ねる理由のひとつは、和子さんの料理がおいしい

いということがある。和子さんや平野さんとこの公子さんの料理を食べさせてもらうと、いつも、ぼくはまだまだ駆け出しや、という気になる。

この日のトリの水炊き、でも、まず鍋にコブと水を入れて、トロ火でゆっくり吹き出すまで待つ。イラチ（あわてんば、すぐにイライラする人を意味する大阪弁）のぼくなんか、はじめから強火でガアーンと煮るが「そうすると、コブの苦味が出てしまうでしょ」と和子さん。

トリ、エビ、シイタケ、トウフ、などを入れるのだが、ぼくが例の卵をお土産に持って行ったら「これは少しゆでて入れるとおいしいから」と、半熟にして、殻をむいて入れる。なるほどとてもおいしい。水炊きに卵をこうして入れるなんて知らなかった。味はお酒をたっぷり入れ、おしょう油と砂糖少々の薄味。

（アチャコとカロリーメイト）

父を訪ねてから一週間後に、今度は息子がスキー・ロッジでうたうのについていった。四月のなか頃から大阪で「大阪サンケイ」の夕刊に毎日（！）しばらく地元ミュージシアンのことなど書かねばならなくなったので、取材もかねてのこと。（ホンマは、久しぶりでスキーしてみたかってん）

長野の桐池の山麓園というところが宿泊所でもあり、会場でもあった。そこで、背の高い、やせてハンサムなアチャコと呼ばれているまさじたちの友だちに会った。奈良の大麻寺の近くで、花火を作っている二十七歳の男。アチャコでもっと太ってる人や思っているから、なんでかいな、と思ったら、花火師だから、ハナビシ・アチャコやて。一家四人で工場を持って作っているが、冬場だけは比較的ヒマなので、スキーをして楽しむという。夏場になる

とメチャ忙しくて、ろくろく昼飯の時間もとれなく、車の中でカロリーメイトを食べて飢えをしのいだりするそう。 「ハラはふくれへんけど、いちおう栄養はとれるし、おなかおさえられるし」。しかしロッジでの洒落れたフランス料理はおいしいけど量が足りないらしく（ぼくでも足らんかった）、 「こんな時は、丼飯で鍋やで」ということで意見が一致した。

（ビーフン入り酸辛スープ）

今月は旅と外食が多かった。またまたタラ豆腐を作ってたので、今度は春雨を入れてスープにしようと思ったが、春雨がなく、ビーフンがあったので、どっちも原料は同じや、とばかり、僅かにタラと、ネギと、豆腐が残ってるスープに、ビーフンをひと束入れて、酢、レモン、ショウ油、ゴマ油を加えて、ホット・アンド・サワー・スープにした。

走る・その四 デイヴィッド・グッドマン

六五歳になるのを極度に恐れて、ノイローゼ気味になってるわよ、と弟の妻はアメリカ訪問からインドネシアに帰って、母の精神状態を弟に告げた。本来なら停年になるはずの今年の誕生日を記念して、なにか贈り物をつけないかと、そのころ河原町通りを茫然とぶらつくこともあったばくに、弟はジャカルタから電話をかけてきた。母をよび、ハワイで落ち合って、誕生日を祝おうじゃないかと提案した。よく気がきくな、とぼくは感心した。贅沢ではあるが、一人しかいない母を元気づけよう、と云々と、いろいろ考えたあげく、よし、いこう！と返事した。

そのことを電話で母と相談することにした。毎年一月の中旬、父の誕生日のころ、ぼくたち兄弟は母を中心に電

話で集まる。これは四カ国を同時になくコンフェレンス・コールと呼ばれる国際通話だ。京都のぼく、ジャカルタの次男、エルサレムの三男、アメリカの母が電話で一室に会するのだ。そして、亡くなった父の思い出や、たがいの近況を語り合う。父をよみがえらせる、ぼくたちの年中行事だ。

失業中で二人目の子供が生まれたばかりのエルサレムの弟は来れなくて残念がっていたが、母はハワイ行き計画をたいへん喜んでくれた。

*

ホノルルに向かう機中、休暇でもまじめに生きるのだと決めていたぼくは、機内映画も観ないで、本を読むことにした。それで第九回芥川賞受賞作品、米谷ふみ子の『過越しの祭』を機内を持ち込んだ。映画を観ればよかった。

「過越しの祭」の話を日本に置き換えて語ろう。アメリカ人の女性画家が「神秘」という、いわば日本を代表する一つの神話を求めて日本にやってくる。日本人の男性とめぐりあって結婚する。日本語があまりできなくて、日本の生活になかなか馴染めない。日本人の姑や小じゅうとの関係もうまくいかないし、求めていた「神秘」はどこにも見当たらない。そこへ子供も生まれた。脳に障害をもつその子供の世話に明け暮れて、十数年が過ぎ去ってしまふ。数少ない施設に子供をやつとあずけることができた晩に、彼女は悟る――日本の「神秘」は幻だった！恨めしい！人生を返せ！彼女はタイプライターの前に腰をおろして書きはじめる。日本の仮面をひっちゃぶいてやるのだ。日本はこの世を惑わす悪の文明。彼女は日本文化についての生半

可な知識を羅列して「小説」を書く。

「主婦体験の作文を出していない」、
「異国で暮らす中年女の怨恨と愚痴」という、一部の芥川賞選考委員の正確な判断にもかかわらず、『過越しの祭』は芥川賞も新潮新人賞も受賞した。

『過越しの祭』は徹底的に閉ざされた作文である。しかも日本人の間でしか通用しない、偏見を中核とした、恥ずべき作文である。選考委員に評価された、大阪弁を導入した文体にしても主人公の内面の言葉であり、まわりのガイジンどもにわからない言語として用いられている。外界に対する根深い不信感をそそり、そうした不信感をもつ読者におもねるこのような駄作に、文学賞をおくるなど、最低だとぼくは思う。日本語でものを書き、日本語および日本文学の国際的な可能性についてあるヴィジョン（幻想？）を懐いてきた者としてそう思うのだ。

だが問題はそれ以上に深刻である。米谷氏が罵っている過越しの祭はエジプトで囚われていたユダヤ人の解放という具体例を考えながら、人間の解放と自由とはなにかを吟味するための祭典である。マルクスをはじめ、多くの思想家にとって、過越しの祭は自由・解放・革命の思想への出発点であった。そしてプリンストン大学の哲学者マイケル・ワルツァーが近著『出エジプト記と革命』で指摘しているように、過越しの祭の解放のイメージは六〇年代後半以来南米を中心に展開してきた「解放の神学」の基本的イメージでもある。この「解放の神学」は最近のフィリピンの政治的変動にきわめて大きな役割を果たしたし、これからの韓国の政治情勢においても重大な役割を果たすにちがいない。

今は過越しの祭を歪曲したり、それを慎重に考える人々を罵倒したりするだけの「怨恨と愚痴」で綴られた「作文」を奨励する時代ではない。さまざまな文化がせめぎあう、激変している世の中で生きる真の辛さを描く文学を書く時代なのだ。

*

ジャカルタから飛んできた弟は、ぼくよりおよそ九〇分遅れて、朝の八時半ごろワイキキのホテルに着いた。すこぶる元気だった。

「おい、兄さん、起きろ。お母さんはまだみたいだから、ランニングにだけようぜ。すばらしい天気だしさ」とかれはいった。

だがすでに睡眠薬をのんで、悪夢から逃れようと努めていたぼくは、ただ唸って、ふたたび毛布を被るのだった。

病氣・カフカ ・音楽（その 二）高橋悠治

病気になるすぐ前にしていたのは、カフカの創作ノートをテキストにした作曲だった。病院にもカフカの本をもちこんで、ながめているうちに、訳文に満足できなくなる。ドイツ語の辞書をたよりに、原文と訳文をくらべてみると、訳者は文章の意味を解釈しながら日本語に写そうとしているらしいことがわかる。

カフカは自分が書くことを *Entscheiden* と称していた。ひっかくこと。文字通り紙をペンでひっかくこと。このことは自体、もう文字通りにうけとる以外にない。これを「書きなぐる」と訳せ

ば、日本語に写しながら、もとはなかった意味をつけたすことになる。

ひっかくことは単語と、それを紙にきざみこむプロセス（このことはカフカの長編のタイトルになった。「審判」ではなく「訴訟」であり、おもいがけないものでありうる一定の結果をもたらす一連の行為の継続をさす。）、さらに単語に対応する世界内の事柄のあいだのバランスを身体でとりながらすすむ。

Stücken という単語を書きつけながら、小動物がのびをするのをおもいうかべ、同時に書き手の筋肉のすみずみにいきわたる緊張を意識する。

文章を解釈する訳文は、書く行為を手を通さない論理と経験の操作に変えている。そこには発見はない。光の消えた後のかたちだけの再現しかない。センテンスではなく、単語の内部にはいりこむこと。たとえや慣用語とし

ての単語の表面をすべりぬけてフレーズから状況をよみとろうとするのではなく、単語を抽象としてうけとるのもなく、むしろ単語の起原にさかのぼり、その構成要素それぞれを、音色とリズムをもった具体的な運動としてとらえ、それらの組み合わせを文字通りにうけとること。

カフカの文章で目につくこと。――再帰代名詞 *es* が動詞をたえず主語の内部に押しもどす。主語は同時にそれを書きつつある身体でもある。長くまがりくねったように見える複合センテンスも、接続詞や限定的なはたらきをする副詞が視点の位置や角度を切り替えていくカットの連続に分解される。

ことばは切りはなす (*Scheiden*)。ナイフ (*Messer*) は量る (*messen*)。過去を量ることばは死者のもの。一方

ことばは決める (*entscheiden*)。未来を決める、まだ生まれていないものことば。ことばを所有することはできない。ことばは向うからやってくるだけ。それを待ちのぞむことができるだけ。

「所有はない。存在だけだ。最期の息に、息たえることにあこがれる存在だけだ。」

「何も無い。ことばを横切ってくる光のなごり。」

「われわれの芸術は真実によって目のくらんだありかただ。後ずさりするしかめ面への光以外にはなにも、真実ではない。」

光、真実、存在。それ以上説明できないことば。ことばが語れないことがあると、ことばがまずしいものだ、ことさらに見せつけるためにあるようなことば。

「たとえについて」という短編のなかで。――たとえのなかで、「向うへいけ」といわれども、現実にごえていられる向う側のことをいっているのではない、どこもしれず、それ以上にかづく道もないような「向う側」をさしているとするば、毎日を生きていく上に、それが何になるのだろうか。

では、たとえを文字通りにとって生きてみては。きみ自身がたとえになるとともに、たとえはうしなわれ、現実がのこる。

「望むのは、しないこと。だが、欲するのは、することだ。
(わたしの望みは、たとえば肘かけ椅子に、わたしの意志は筋肉感覚にかわる。)(「ヴィトゲンシュタイン」カフカ――「目標はある。道がない。道と名づけられるのは、ためらいだ。」

人間はこの事実の世界だけでは満足していられない。だが、それ以外に何かあるだろう。「これだ」といったときには、それは経験と論理にくみこまれている。語ることができぬものについては、「これでもなく、あれでもない」というよりしかたがない。

地上に生きる二次元の生物がいたとして、星の光がそれを照らしている。だが、かれらには、星を見ることができない。星を指さすこともできない。ならば、たとえそれができたとしても、こんどは星を指さしているその指が見えないものになるのだ。かれらにできるのは光にひたされてあることだけ。

こう考えると、「祈りのかたちとしての文学」というカフカがわかるような気がする。光にひたされてあることは、二次元の生物にとって神秘的な体

験ではなく、そもそも体験とよばれる
たぐいの時間内のできごとではなく、
瞬間ごとにたえずくりかえされる身体
感覚にすぎない。それを創造とよぶな
らば、かれは神をもたない世紀の人の
のだ。

ところでこの「ためらい」だが、こ
れが方法であるとすれば、(たしかに
方法ということばの起原言Latiposに
もどれば、道についてくねくねまがる
線を方法と定義することはできるだろ
う) あらかじめたてられた目標にたど
りつくための最短距離どころか、どこ
かにたどりつくこと自体がありえない
ことなので、たえず創造しつづける、
(それも意志にしたがって) というこ
とだけが方法である保証であり、くね
くねまがる道の上にあるかぎり、光を
めざさなくとも、光の方がついてくる
だろう。

一に考えながらメディアを選ぶとすれ
ば、こうした手段はかれの時代には時
代おくれのものだったが、いまはエレ
クトロニクスによってもまだ実現され
ていないメディア・アート、たとえば
双方向の電子回路を通じて作者から直
接発信される音声をとまなうコピー文
書の、とりあえずの手づくりモデルと
考えてもいい。死者のものであると
もに、まだ生まれてこないものにも属
するという「ことば」にふさわしい、
その伝達手段。それは、権力をしらな
い、所有をしらない、存在だけに縮小
した人間にひらかれる。

「生のはじまりの二つの課題——き
みの輪をたえず縮小し、きみ自身が輪
の外のどこかにかくれていないか、た
えず再検査すること。」

こどもと小動物の生きる知恵。そこ

一息つく、そこに展望がひらける。
それは可能だ。ただしそれが最期の息
であり、目のまえにひらけた風景から
道は急角度に遠ざかっていくのを承知
の上なら。展望は「これではない」と
いうため以外には役にたたないものだ
った。

カフカのノートブック、カフカのペ
ン。自分のために考え、自分のために
書く。書きはじめ、中断し、(インク
は意志のしたたりだから、余白をとら
ない文字の列は訂正をゆるさない。中
断したものは、そのまま見捨てられる
か、はじめからやりなおしになる。) 区
切の線をひいて、別のものをはじめ
る。

カフカの建物。ドアをあけると、長
い廊下。それは進むほどにはてしなく
のびていき、結局どこにもいきつかな

には自意識はない。方法はあとからつ
いてくるなら、まず書きはじめること
だ。

「魂を観察するものは、魂のなかに
侵入することはできない。たぶんどこ
か端の方で触れあうところはあるだろ
う。この接触でわかるのは、魂も自分
自身をしらないことだ。それは、そう
して未知のままであるよりしかたがな
い。魂の外に別なものがあつたとすれ
ば、かなしいことだったかもしれない
が、そんなものは何もないのだ。」

こうなると、カフカの創作ノートを
テキストに作曲するということも、そ
んなに気楽なことではなくなった。入
院前に一応完成した楽譜をすくいだそ
うと、あれこれ考えてみたのも、むだ
なこと。ノートブックそのものとおな
じように中断し、「たとえについて」

い回廊なのだ。階段をのぼり、(もち
ろんこの階段も廊下とおなじようにの
びていく) 次の階に幸運にもいきつけ
たらのなしたが、また廊下がはじま
る。おおきなものは、つかれはてて途
中で死んでしまうが、こどもや小動物
はそれをたのしむ。残酷なよろこびで
はある。

断片が充分長くなり、まとまった見
かけをとるにいたると、次の段階は、
妹や友人たちにそれをよんできかせる
こと。いっしょに笑うことができる。
友人が原稿をもちだして本にするのは
どうでもよいことではないし、いくら
か虚栄心を満足することだって必要悪
ではあるが、カフカの本はサミズダ
ーのように、朗読・手渡し・筆写のよ
うな直接のメディアがふさわしい。
顔の見えている範囲で、双方向のコ
ミュニケーションが成立する相手を第

でいわれているように、カフカのこと
ばを文字通りにうけとって、音のうご
きのノートをつくることから再出発
する。

紙とペンにかわって、音を「ひっか
く」のは、コンピューターに連結した
シンセサイザーのキーボードであるだ
ろう。(ことばを事象のモデルとして
つかったヴァイトゲンシュタイン流の逆
転にならって、最新テクノロジーをプ
リミティヴ・テクノロジーのためにつ
かう。) この場合は「打つ」と言った
方がいい。くりかえし打つこと。内部
感覚をたえずはりつめたまま、キー
の上のわずかなうごきを意識のなかで
拡大し、あるいはいいかげんに通りす
ぎる。急に中断しては、ちがうところ
からやりなおす。この即興のリズムと
キーを打つ指の速度がメモリーによみ
こまれる。そのあとで、方法がはじま
る。(つづく)

音楽時評 坂本龍一

●今月も相変わらずレコードはあまり聴いていない。時間がなかったから。レコード会社から送られてきたレコードが数枚、それも聴かずじまい。一体とても音楽が聴きたいのに時間がなくて聴けないのが悔しいのか、たとえ時間があったとしても、そもそも音楽を聴きたくないのか自分でもよく分からない。少なくとも心から（ちょっと純粹すぎるが）音楽が欲しくなるには、何も音楽的環境のない場所に七週間以上は閉じ込められなければならない。（もちろん僕の場合）というのも「戦

「劇的狂気の力」を見た。動作のミニマル。別に目新しくはない。暗い舞台のホリゾンに時々写し出されるスライドが、ウイム・メルテンやワグナーの音とからむ時「劇的」なものを感じる。しかし何と古色蒼然としたステージだろう。これがヨーロッパなのか、それとも「はづし」なのか。最もモダンなものが最も古びて色あせて見える時代に突入している。音楽もそうだ。YMOまではそれ以前のポップスの機械によるシミュレーション、或いはパロディだった。過去のあるスタイルを機械でマネてみせるのが面白かったしマニュアルとの差異が快感だった。しかし今は違う。過去の何かに似ているだけでも白けてしまうのだ。最早過去の焼き直しでは満足できなくなってしまうている。パラダイムのどこかのタガがはづれてしまった。ルールもないのでタブーもない。タブーがないの

メリ」の撮影でクック諸島とニューヨークに七週間居ただけけど、何も音楽と言えないものがない状態で一度も飢えを感じたことはなかった。案外平気なんだな、という感想をもったが、多分あそこには彼の音と風と太陽があったからかも知れないとも思った。音楽はないが彼の音と風と太陽のある場所、音楽はあるが忙しさと街のノイズと疲労のここ、これは簡単に較べることは難しい組み合わせだ。音楽家だからといって、音楽だけやってるなんておかしいと言っておきながら、何にもできないでいる。そもそもそういう言い方自体、何にもやってない奴の言い草な訳で、色々やってる奴は元々そんな言い訳をする必要などない。やりたいう事は沢山ある。やりたい事ができない状態は何とか改めた方がいい。でも一体、皆さんは皆さんの内で、やりたいう事とそれが成就される割合はどうな

でそれを犯す快感もない。ひたすら白けているだけだ。強引な革命がやってくる前に内部自体が空洞になってしまった、そんな感じだ。倒すべきルールがないので革命もない。

●NHKのDJを辞めたことは前号に書いたが、番組で年に二、三回特集していた「デモ・テープ特集」なるものがレコード化されることになった。リスナーが作って送ってくるデモテープの数が異常に多かったので、何となく番組で発表するようになったのだが、面白ければ発表されると分かり、元々デモテープが発表される機会などなかったのが、全国放送だからあっちこちのリスナーのデモテープやその評が紹介されるので、作る方もやる気になってしまふ発表目当てのや、笑わせるのがメインのや、やたら録音技術がいいのやら、下手やら、モノマネやら、プロになっちゃったのやら、とにかく

ってるんでしょう。まあ、そんな事、答えは無いよね。愚問でした。僕が今やりたい事はね、旅です。ああ、なんて平凡な人間だろう、僕は。でも、しようがない。旅といってもね、ロンドンやパリなんかどうでもいい。そうじゃなくてね、全然言葉の通じない色んな人に会って、するとシンプルな表現を強制される。好意のある時は好意を示し、困っている時は困った顔をする。腹が減っている時は腹が減っている仕草をし、全ては相手に誤解なく伝わる様にオーバーに表現しなくてはならない。これは僕の一番不得手な事。それが不得手でもすんでしまう環境で生きてきた。この習慣をちょっと変えたいな、と最近思う。それで手っとり早く旅に出てしまえばいいのだが、引きづっているものは沢山ある。なかなか砂漠への一歩が踏み出せない。

●バルコ劇場で、ヤン・ファープルの

色々な奴が色々なテープを作っちゃった。毎回三百本ぐらいのテープを二十本ぐらいにしぼって十五回ぐらい発表したもので、オンエアされたものだけで三百本ぐらいある。その中で面白いものを（というのには一つの基準で選ぶ訳にはいかない）、ましてや「音楽的」という基準など通用しない世界の面白さ）選りすぐりLPにしたのが、「デモ・テープ」として4/21に出る。ジャケット・デザインもリスナーの中の美大生を起用して、音楽もデザインも全て素人に徹してみたし、値段も二〇〇〇円におさえた。弟子にしてくれと上京して来ちゃった奴とか、解散したバンド、受験でテープを送ってこなくなった天才や、異常に受けたのがブレッシャーになってダメになった奴etc. これからも続けたいし、自宅録音派のネットワークも作ってあげたい。とにかく楽しいLPです。

水牛かたより 情報

●ゲオルグ・ヴァンシャヘーリ バルト
ーク・リサیتال(東芝レコード)
LRS 九〇六 定価二千五百円)

ヴァンシャヘーリ氏は私のピアノの恩師である。ハンガリー人で、十二才からずっとブダペスト音楽院でバルトークからピアノを学んだ。その後ベルリンでエドウィン・フィッシャーにも師事している。今時珍しいスケールの大きい、自在な表現をする人である。バルトークの演奏によくみられる機械的な冷たさや、たたみかけるような堅いテンポなどが一切ない。バルトーク直伝の語り口と、彼独自の生き生きとし

たリズム、想像力で実に魅力的な演奏だ。(高橋アキ)

●ラミン・コンテと高田みどり

5月18日2時、19、20日7時。渋谷西武SEED。前売3300円。当日3500円。問合わせ、SEED ☎362・3795

ラミン・コンテさんはセネガルの語りべ。コラという弦楽器をつかって弾き語りをする。高田みどりさんはバラフオンとかタイコとかの打楽器を演奏する。なお、最近高田さんは「つるかめアートコーポレーション」という奇妙な会社の取締役社長になりました。専務はベースの井野信義とピアノの高瀬アキです。(田川)

●家庭内店舗のお知らせ

ふだんは、布団や洗濯物を干したりしているペランダで、4月から毎週土曜

日、お店を開きます。

手染め糸、手編みニット、藍染の布地とふだん着、生活用品、織物、焼酎など売っています。是非、お出かけ下さい。11時頃から5時頃まで。(7月、8月は夏休み)

世田谷区成城4・12・25 ☎482・4539 (ひらのきみこ)

●先月号の情報でのプレヒト「子供の十字軍」がはじめ50人、あとで55人になっていることについて、木島始さんから葉書をいただきました。

「原詩があるのでひらいてみると、前の方は、Für ein halbes Hundert, となっていて、後の方は、二度とも、fundamentale となっています。前の方が大まかな言いかたなのかなあ、と一応考えられますが——まあそこまではつきとめたので、一筆。」

前の方は日本語で

いえば「百の半分」とでもいうのでしよう。後の方はまさに55で、音のおもしろさで選んだ数でしょうか。(高橋)

●新玉川線桜新町駅から歩いて5分、れんが色あざやかな長谷川美術館。あの「サザエさん」や「いじわるばあさん」の原画をはじめ、長谷川町子作の陶器(これがよく見るとおかしい)がならんでいる。とても休館日がおおいのも特徴。毎週月曜日はもちろん、6月〜7月中旬、9月、12月中旬〜2月さらに展示替期間も長い。あけたい時だけあけてほしい、といっているような案内。☎701・8766。本、絵ハガキ、いじわるばあさんのタオルも買えるよ。(高橋)

●永井浩著「見えないアジアを報道する」(晶文社 千五百円)

永井さんは毎日新聞外信部の記者。

80年5月から84年10月まで特派員としてバンコクに暮らした。80年の春アジア・アフリカ語学院のタイ語のクラスで永井さんとわたしは「同級生」だった。この本を読んでいて、もう6年も前のことなのに、あの教室で授業を受けている永井さんの真剣な姿勢を思い出した。メイン・テーマはタイに対する日本の経済侵略だが、ここには永井さんがバンコク支局長として会ったさまざまな階層のタイの人たちの言葉がたくさんある。日本人の言葉もある。永井さんの姿勢ははっきりしている。それはスラク氏につづく知識人の姿勢のように、わたしには思える。(八巻)

●3月21日の夜、スラチャイから電話があって、トーキョーに着いた、という。東京での仕事の相談で来た、という。カラワンの新しいテープといっしょに、悲報ももってきた。カラワンの

仲間であり、水牛でカラワンをよんだときも、いっしょに来て、日本でのコンサートのヴィデオをつくるんだ、とはりきって、たくさんの人がまきこまれたこともある、あのセーニーが急死したというのだ。3月11日の夜、心臓マヒだったらしい。33才だった。いつも時間がないと言っていたね、とスラチャイとセーニーの思い出話をする。そう、死ぬのを自分で知っていたのかも知れない。セーニーが煙になって空にのぼっていったとき、取材でフィリピンに行くため予約してあった飛行機がちょうど煙の上を飛んで行くのが見えたので、まるで予定通りフィリピンに行ってしまったみたいだった。とても残念だけど、でも、マイ・ペン・ライ(気にかけることはない)。ちょっと先に逝っただけさ。ぼくらだってそのうち逝くんだから、とスラチャイは自分に言いかけた。(八巻)

編集後記

病気がなおってはおじめての夜の外出。藤本和子とデイヴィッド・グッドマンの引越祝いをおこなった編集会議をバンタイでひらく。だれも雑誌のことに触れないので、引越してきた二人は不満らしかったが、いわないですむことはいわないでいられるのが会議の効用というものだ。だれも何もいわないから雑誌はなんとなくていく。病気はなおったらしいが、まともなくらしにもどる気はまだなれない。はたらないのはいやだが、はたらかないのはいい。あたまはこわれたままのようだ。家にいると、必要もないのに横になってゐるのに気がつく。あたまが低い位置にある方が、かんがえが自由にうごきまわれるような気がする。重

力にさからって、必要もないのに立っているようでないと、まともなくらしとはとてもいえないだろうが、あたまを高くあげれば、世間の網にかかるのだ。

今年は桜がおそいので、御近所の長谷川美術館に田河水泡先生の講演をきみにいく。のらくろ(といっても知らないかな)は焼鳥屋の娘お吟ちゃんと結婚し、喫茶店のマスターになって健在だそうで、作者の方は復刻版の印税で楽にくらせるので、もう御活躍はしません、と立ち上がり、みずからパチパチと拍手をして講演はおわった。サインをもらう長い列。千ページもありそうな「のらくろ」復刻版をかかえたおじさんもある。賛美歌集にサインをもらおうとした女の人は、落書をしちゃいけません、とことわられた。そういえば、田河先生はクリスチャンでしたね。

(高橋)

* 予約購読の申し込みと送金は郵便振替を利用してください。

口座名 水牛編集委員会

口座番号 東京四一九一七九二

購読料 一年分三〇〇〇円(送料共)

住所 氏名、電話番号、何号からと明記。

* 本誌は次の書店にあります。

模索舎(新宿) ☎三五二一三五五七

ブックイン(阿佐谷) ☎三三三〇一七八九七

信愛書店(西荻窪) ☎三三三三三四九六一

ワンラブブックス(下北沢)

☎四一一一八三〇二

アール・ヴィヴァン(西武池袋店12F)

カンカンポア(西武渋谷店B館B1)

ストアデイズ(六本木ウエイブ4F)

名古屋ウニタ書店 ☎七三二一三三八〇

水牛通信 第八巻第四号 一九八六年

四月十日 定価二〇〇円 発行人 堀田

正彦 発行所 水牛編集委員会 ☎154

東京都世田谷区新町2-15-3 八巻方

電話〇三(四二五) 九六五八 振替口座

東京四一九一七九二 印刷所 佛トライ

プリントショップ